

近世史料の分類〔遺稿〕

—第十八回近世史料取扱講習会講義草稿—

鎌田 永吉

一 はじめに

二 なぜ分類するか

△近世史料の特質と分類の意義▽

〔1〕 一般図書との相違

〔2〕 近世史料作成の目的

〔3〕 襲蔵の理由とかたち

〔4〕 分類の目的・意義

三 どう分類するか

△分類の実際と問題点▽

〔1〕 これまでの分類方式

四 分類方式は確定できるか

△その条件と意味▽

〔1〕 主体的条件

〔2〕 客観的条件

〔3〕 共通方式の確定

〔4〕 残された若干の問題

五 おわりに

一 はじめに

分類を取上げることには、大変気が重い。ここには、主として図書館関係の方が多いが、図書館では永い期間にわた

近世史料の分類〔遺稿〕（鎌田）

って定着している分類についての体系的方法があり、図書館の人たちは、分類をつくりあげていくことについてとりわけ熱心であり関心が深い。いわば、分類の専門家である。その方面の専門家を相手に話すということは、「専門家」ということは自体の重みに押されて気が重いということもないわけではないが、よく考えてみると、第一に、実は、近世史料の場合は、あとで述べるように、図書の場合と違って、理論と実際の両面において、いわば決定版とでもいふべきもの、あるいは絶対多数から支持されているものがないのだ、という事実がある。

第二に「近世史料の場合は」といったが、では、中世史料や近代史料の場合そういうものがあるのか、それとの関係はどうなのか、という点についての問題も充分あきらかでないひけめがある。

第三に、このことと関連して、図書館関係の人たちは、図書とちがう「史料」といわれるものについて、ひごろどんな内容のものを対象として扱い、それをどう扱って整理・分類しているか、という事実が適確につかめていない。これはもちろん控え目に言ったのであって、かなりの程度はわかっているのであるが、少なくとも、ここに集っている人達が、いま、この時点で現実^に周辺にある史料の取扱いについてどういう関係におかれ、どんな関心を持って来ているか、ということについては、充分に、わからぬ。お互いに相手の問題関心やそれに基く要求が具体的に明確でなければ緊張関係のもとでの、効率的な勉強はできない。分類にかぎっていても、例えば、特定の文書の調査目録をつくる場合、地域内の史料全体の所在目録をつくる場合、図書館等で、郷土資料目録をつくる場合（図書・資料・史料を含む）、特定文書の目録をつくる場合などは、少しずつ目的に応じて方法が違っているはずであり、それは教育委員会とか、市町村史編纂室とか、文書館・史料館とか、図書館とかの現時点での役割の違いなどとも関係している。それぞれの機関や部局が、どういう役割をもち、相互にどんな関連を持つべきか、ということにもふれたてしかたがないが、とにかく、関心や要求が多面的で複雑であることはまちがいない。

そこで、この講習会自体は、もともと、一々の決定版を示してその解説をするというような目的も性格もいっさい持っていない。ここで「分類」を取上げる目的は、あくまでも、ひごろ、近世史料の調査・研究を通じて、収集・整理・分類の実際のしごとを担当して来ている者の立場から、同じような実務にたずさわっており、あるいは、これからたずさわるはになっていくみなさんに対して、なかでも、われわれがとりあえず分類をとり上げ、近世史料を分類するとはどういうことか、という大きな原則を確認しあうことに主眼をおき、実務上の経験を通じて持っている問題点を伝えることにある。

しかし、これでは当方の一方的な持ち出しで損するだけなので、ぜひみなさんの側からの問題点の提出もなければならぬ。つまり対等にギブアンドテイクでなければならぬ。あとでふれるように、恐らく戦後二十数年にわたってさまざまな方が、さまざまな目的や立場から近世史料の分類方式を提示され、これに従って実践されて来た。しかし、少なくともそうした関係者の間でそれらが同じ場で相互討議され、相違点や共通点の認識を通じて体系化が可能かどうかを考えるという具体的な動きとはならなかった。図書館関係の方を除けば、大体において、提案者の側からの一方通行であった。これは、一部を除いて、提案者が大体、大学を主とする歴史の専門的研究者であったということにある。しかし、今日、都道府県段階や市町村の段階まで、文書館・史料館が設立され、実際の活動があり、その運動も活況化しはじめて来ている以上、それは、いまや議論をふまえた実践の問題になって来ているのではないか、と思われる。

もちろん一つの体系を決定版としてつくるのが可能か、またそれは良いことかどうか、は別問題である。むしろお互いとの相違点を確認しあうことも、小異を残して大同につくという意味で広い意味の体系化である。

その必要も、わたくしたちは何度も言っては来ているし館報にも書いている。しかし、ベトナムの小話のようでは

いけないので、現在、文書館・史料館の関係者で自主的により集まって、所在調査や収集、例えば行政機関の資料を、どんな基準でひきつぐか、行政の観点と図書館・文書館の観点が違うことをどう考えていったらよいか、整理・分類、あるいは保存管理等の実務についてはもちろん、文書館・史料館の建設、館員の身分保証などにわたった、平等な立場での研究会を持つ動きが具体化している。

この時間が、そういうもののへの一つの出発点となってくると、大変うれしい。

二 なぜ分類するか

△近世史料の特質と分類の意義▽

〔1〕 一般図書との相違

まず、近世史料の取扱いに当って、一体、なぜ分類ということが特別な意味を持っているのか、それは一般図書を分類することと、どういう違った側面を持っているのか、という点について、はじめに近世史料の特質を通じてみておきたいと思う。

(1) まず、一般の図書と近世史料はどこがどう違うかという点について、これはわかり切ったことであるかもしれないが、見て行きたい。この場合の相違点は、もちろん、見かけ上の特長だけにかぎってである。

(1) まず、第一に、近世史料は、原則的にいえば、同じ内容のものは一点しかない、ということである。内容の同じものでも、無限定には存在しない。なお、この場合「ない」ということは、本質規定だから、実際の量の在り方のことはとりあえず問題にしない。

(2) 第二に、成立に多様性がある、ということである。「整理」でも話があつたはずであるが、原本か写本か、控

えか下書かという成立事情の区別は、一般の図書には見られないことである。初版・再版などというものはあるが、それは、ふつうみればすぐわかるようになっており、逆に、ふつうの史料の場合はすぐわからない。

(3) 第三に——これが大きな特長になるが——表題（図書の「書名」に当る）や、作成者や作成年代がない、あっても不完全な表記しかないことが多い、ということである。なお作成者のほかに宛名人があるのは記録に対する「文書」の特長だが、これも明記されていないことが多い。これに関連して、宛名人は、公式文書などでも、肩書——身分や地位、階級や職業などを示す——のないのが普通であることは、昨日までの読解の時間で良く見たとおりである。老中なんのなにがしとは書かず、名前だけであった。

(4) 図書の場合には普通見られる、発行者に当る者がいない。だから、成立の客観的事情が判明しないことが多い。

(5) そのほかに形態上の相違があることは当然のことだから、これはふれない。

ごく簡単に見ただけで、ざっとこういう相違点をあげられると思う。なお、こうした見かけ上の相違に関連して、当然利用の面でも少し違いがある。例えば、近世史料は、一冊一枚づつの利用ということはあまりなくて、グループとして、利用されることが多い。だから、史料を扱う場合は、通常の図書の整理では考えられないことが——つまり、作成者や宛名人や時代を考証し、表題を付けるといったような作業が、まず必要なことが一つの特長になるわけである。ここまでは昨日話があつたはずと思う。

[2] 近世史料作成の目的

それでは、近世史料には、なぜ作成者や宛名人や年代がなかったり、あっても簡単であつたり、表題がついていなかったりするのだろうか。

理由は、もうおわかりと思う。近世史料は一般図書と違って、本来、不特定多数のものの利用を前提にして作られ

ていないからである。一点しかない、という先述の特質は、とくにそのことを表わしている。つまり、史料は特定の人と人（あるいは機関と機関）との間で、あるいはそれぞれの人や機関の内部で、そのときどきの、特定の目的をもって作成されるのであり、第三者がこの史料を利用することは本来考えられていないのである。本来第三者の利用を前提にして作成されていない史料を、われわれは不特定多数の者の利用に供するように処理しなければならない。（だから、これはわれわれにとっては、ある意味で、大げさな表現だが「宿命」的なものになっている。分類の必要性は、じつはこの「宿命」と深くかかわりあっているといえるだろう。）

一般民衆に対して領主が出した「御触」のようなものは、少し違うのではないかと言われるかもしれないが、これもよく考えると、支配者が被支配者に宛てた文書の一つであって、図書が本来著者（書き手）と読者（受け手）の対等の関係を前提にして作成され利用されることは本質的に違っている。出版文化というものが近代社会の成立を特長づけるものの一つであることは、図書館の専門家であるみなさんには常識に属することだろう。しかし図書の場合にはなんでもないことである、この「不特定多数」というのは、当事者間の対等関係ということと内容とし前提にしていることばだ、ということは、実はたいへん大きな意味を持っていることがおわかりと思う。そういう内容を持った「不特定多数」ということばに類する語彙なり概念なりが、江戸時代の社会で日常使われていたのかどうか、私にはいまわからない。ついでながら、江戸時代には、一般庶民の家には表札がなかったし、手紙の宛名なども、江戸本石町何丁目何兵エ店何兵エと、共同体の統轄者が、一応のめやすであればよかった。大名家や役所等も同様で、関係者がわかればすむことなのである。商店の看板などは、これに対して、国籍・年令・職業をとわず不特定多数の人を相手にするから必要であった。

先の点に帰ろう。村でいえば、近世史料はふつう一般の生産者農民、町でいえば、中・下層の町民などの手許では

作成されることが少ない。一般の農民が手紙などをあまり書かなかったのは、字が書けなかったということよりも、日常的な生活圏の狭さに根本の理由があっただろうし、日記や財産関係の書類もその必要性なり条件なりが欠けていれば作成されるはずはない。もちろん、百姓一揆のときの連判状など、特殊な事態のもとでは相互に文書・記録を作成しあうこと、それを保存することはあった。しかしこの例は少ない。村民同志が喧嘩や出入で、わび状や、仲なりの証文・三下り半（離縁状）などを書くことはもちろんあるけれども、これもよくみていくと、当人同志というよりも、村役人や領主が介在して、仲介者や保証人として名をつらねていることが圧倒的に多い。こうした史料の多くも、大ていは、ふつうの農民の家というよりも、村役人の公的文書の中で発見されるのは、こうした史料も、秩序の維持・治安の維持という行政上の必要上作られたもの、という考えでみれば、なっとくがいくことが多い。

村の史料は、ふつう村役人が支配機構の末端にあって行政上の必要から作成する民政史料とか、地主や商人である者が自分の財産管理や小作地経営とか農業経営、商業活動の必要上作成するわけである。町役人や上層町人の場合も、同様な観点で作成される。領主については、幕藩制下の領主社会（貴族社会）全体の中での、自己の身分や地位、あるいは、役割といったようなものの保証や証明、あるいは支配・統治という観点に立って、より総体的にいえば、客観的には、——個々の動機や目的をふくめて——「支配」・「統治」者という立場の史料を作成し、保存してきている。かれらは、好むと好まざるとにかかわらず、客観的にはそのような規定を与えられている。物ずきで、ひまにまかせて作ったのではない。

[3] 襲蔵の理由とかたち

このことは、実は近世史料が保存され、襲蔵されているかたちと無関係ではない（後述）。われわれが接する近世史料は、まず、ほとんどの場合「家」文書、「家わけ」文書としてある。そのように保存・管理されているものがわれ

われの目の前にあらわれて来る。土地に関する史料も、租税に関する史料も、徳川家文書とか依田家文書としてあるものであって、家文書のワクをこえて全体として通した意味での租税関係文書とか土地関係文書というかたちでは、まとまって近世社会の史料は本来存在しないのである。この点を記憶しておいてほしい。

また、農村では、役簞笥文書といって、村役人の交替ごとに引継がれる公用文書があって、これが明治に入って戸長役場とか村役場に引継がれていくことが多い、という話は前にきかれたと思う。江戸時代最後の名主などの家に残ってしまう例も大変多い。しかしこの場合でも、「——村文書」はあっても、何か村にもわたっての土地関係文書とか租税関係文書というようなものが、「村」文書と別にあることはないのである。かりにあっても、それは、村文書ではなく、領主側の文書としてある。(この場合も領主〇〇家文書) こういう作成のされ方も、保存・管理もふつうはなかったといつてよいと思う。これは、江戸時代の村が、「共同体」として生産や政治の単位として存在し、それが支配や行政の単位として設定されていたことと関係があるわけである。領主の場合も、「家」の維持あるいは、被支配者社会に対する武家社会という立場を離れては、史料は作られない。

近世の史料が、この「家」と「共同体」を基礎にして作成され、襲蔵されて来ていたということは、前述のように、この「家」や「共同体」とその相手以外の関係を念頭において第三者の利用を前提にして作成されたものではないことをはっきりしめしている。「家」と「共同体」を「階級」・「身分」とおきかえてみた場合に、個人と個人の間の、たとえば「手紙」なども、まったくの私的なもの、消息状などを除けば、大部分そうした集団Ⅱ階級・身分を背景にして作成され、伝えられていることがわかるはずである。その意味で、近世史料をみていくときは、史料が領主・農民・町人といった近世社会の身分制と深くかかわりあって作成・襲蔵されている事実にもとづいて、そうした身分制なり階級制なりをあらかじめ念頭において、一つ一つの史料や文書の特徴をつかまえておく必要があるわけ

ある。これから史料を読む場合は、以上のことを念頭においてほしい。一点の史料をどんなにこねくりまわしても、その史料の性格はわからない。——全体の位置づけも意味も正確にとれないのである。

〔4〕 分類の目的・意義

以上述べてきたことを前提にして近世史料分類の目的なり意義なりを考えてみると、つぎのようになると思う。

つまり、近世史料の分類は、文書が「家」「村」別の文書として存在することを前提に、その家や村のなかでそれぞれの史料が作成された動機や背景にもとづいて、その史料が文書のなかで本来持っていた位置や役割を復原していく作業なのである。あるべき場所にもどすことだ、といっても良い。あるいは、現代にひき出すのではなく、当時押し戻してやることだ、といってもよい。分類というのは、利用を大前提に行われるものなのだから、それ自体きわめて科学性と客観性をもっていなければならないのであるが、この科学性・客観性というのは、どんな角度からの利用にもたえうるということであるとすれば、何よりもまず、一つ一つの史料が作成された当時の役割を客観的・科学的に明らかにしておくことが必要なわけである。その意味で、本来、個々の特定の家や村に関する関心を越えたものとしては作成されていない個々の史料を、その家や村を超えた共通の関心事を無理に設定して、そのワクの中にとじこめてしまうのは、前の理由からいえば好ましくない。（このことについては、あとで分類のところで具体的に取上げよう。）

だからあとでも出て来るように、近世文書目録の分類項目に、「総記」とか「社会科学」とか、「司法」などというものを見かけるが、こういう現代的な科学分類の観点で史料をとらえてしまうと、本来のその史料の位置や役割・機能といったものを見失ってしまう恐れがないか、という問題が出て来る。ただ、そのような現代の科学概念による分類の態度や方法は全く好ましくなく、不可能であるかといえば、必ずしもそうとはいえない。しかしそういう分類

は、まず文書の本来の在り方に注目するわれわれの立場にたてば、第二段階、第三段階の分類なのであって、当面の課題から少しそれて来る。この点はあとで触れたいと思う。なお、ここで整理と分類の關係について、きわめて譬喩的にいえば、いわば自然児である個々の史料に名前や性別を与え、目鼻や衣裳をつけて一人前のいであちをさせてやることが整理の仕事であるとすれば、分類は、一人だちした史料にその文書内における位置と役割をきめ、性格を与えてやる作業であるといえよう。少し気どっていえば、人間にたとえれば、一枚の紙きれに生命をふきこんで、史料としてよみがえらせるのが整理で、それに人格を与えてやる仕事は分類だ、といってもよい。

さて、先ほど、分類は、近世史料の在り方からいえば、史料取扱の実務担当者にとってはいわば「宿命」だと言った。しかし「宿命」であっても、もし史料が本来の作成の動機、目的にそったままの状態で保存・管理・襲蔵されていれば、実はこの仕事もかなり楽になって来るのだが、現実の史料の在り方は、そういうものとは違って、一定の目的にそって作成され、保存された当時の原型が大きく損壊されているのが普通なわけである。少なくとも、その復原作業は免れない。図書を扱う場合には、こういうプロセスはまずないわけである。損壊状態はそのものとして手をつけず無作為に配列せよという極端な意見は別としても、分類はしないで、型態ごとぐらいか、少なくとも年代順ぐらゐで配列しておけ、という意見も傾聴すべきところがないわけではないのである。しかし、これは現実的な意見とはいえない。なぜならば、利用者は多くの場合、自由に書庫に入って、ある文書全体のようにすを見渡し、史料の全ぼうに接した上で、一つ一つの史料を手にとって見ることはふつうの場合でできない。そこでは、目録によって、一応の利用のめやすを与えてやるのが必ず必要になって来るわけである。

以上、やや原則論に属することをのべたが、これから少し具体的な例に即して、分類上の実際の問題点を取上げて行きたいと思う。

三 どう分類するか

△分類の実際と問題点▽

これまでに述べた目的や意義にそって、では分類を実際にどうやるか、ということになると、問題はとたんに複雑怪奇の様相を帯びて来る。なぜそうなって来るのか、ということについては、これからおいおいわかりただけると思う。

本題に入る前に、分類は、具体的にはどういう場合に必要なのか、ということを確認しておきたい。

- 地域内（市町村・県・国全体）の史料全体の所在目録を作る場合
- 図書館等で所蔵郷土資料目録を作る場合（図書・パンフ・統計書・史料などの所蔵物）
- 機関等で特定文書の目録を作る場合（特定文書の調査目録を作る場合もこれに準ずる）
- の場合は文書ごとにやれば別であるが、一つの項目をたててそれに該当する史料を個々の文書から切離して配列する場合を考えれば、共通性を重視した項目はかなり大まかな目やすになると思われる。○の場合についてはあとでふれよう。

この時間は、右のうち○を中心にすえて、近世史料の分類は基本的にどんな考えに立つて行うべきか、基本的な考え方を検討して行き、これによって○○のことについても若干ふれて行きたい。

〔1〕これまでの分類方式

問題点をはっきりさせるために、最初にこれまで発表されているいくつかの分類方式を検討して行こう。ただし時間の関係もあるから、細部にわたっての説明は省略する。ここに掲げた参考資料のいろいろな分類表も抜すい・省略

したものだから、詳しくはこれらのもとの表にもとづいて検討してみてほしい。⁽³⁾なおこの点については、史料館の大野瑞男氏が、「近世史料分類の現状と基礎的課題」という論文を発表しているので、お読みいただきたいと思う。⁽⁴⁾この項についてこれから申上げることも、多くはこの成果にもとづき、日頃の討議を前提にしているものである。

①近世庶民史料調査委員会分類項目一覧⁽⁵⁾

これは、同委員会が全国の関係者によびかけて庶民史料の所在調査をやって「近世庶民史料調査目録」を作ったために、目録用紙に史料の大体の種別を書込むときの便宜上のめやすとして示したもので、それ以上でも以下でもない。そういう性質上、項目が大変網羅的であり増減改変自在の余地を大きく残してあるし、配列順序に基準らしいものがないのも当り前である。さきの①がこれに該当するものである。だから、これはある特定文書の系統性をもった分類項目としては適當でない。なぜなら、先にのべた「家」と「村」という文書を規定する基本条件とは無関係に作られているから、「土地」といい「土建」と表わしただけでは、文書の性格はわからないし、史料の性格や位置もわからない。作り手と受け手の性格が不明確な項目だからである。分類項目というのは、できればそれが、それだけでも文書の性格を推定させられうるようなものであった方がよいといえよう。これが発表されて、本来の意図とは違うところで、文書の分類項目として活用されて来たのは事実だが、これに問題があることはおわかりと思う。

②平井良朋「近世資料主題分類表」(新訂第六)⁽⁶⁾

平井さんのものは、図書館関係者の発想から体系化されたものとして、よく知られているものである。

いわゆるNDCの科学分類ではないが、独自のNDC準用を行ない、項目の数字記号化を試みたものであって、ここには示していないが二層、三層の分類も考えられている。近世史料を全体系的に構想した網羅的で、従って固定的な分類項目であって、それだけにきわめて精緻な分類表であり、その努力がたいへんなものであったことがうかがえ

る。有坂隆道氏の試みも、これと似た性格をもつものといえよう。

平井氏も有坂氏も、先述の「家」と「村」との観点に立っての「家わけ」文書を基本的なかたちとしてとらえて、これをくずすことは考えていないが、「家」文書の分類に当ってこの方式が適用されて来ると、記号化を通じて、じつは将来日本全国の近世史料の分類別所在調査目録が作成されうる有力な手がかりになるものと、私は評価している。

ただ、そうした面を認めつつも一つの文書の実際の取扱い上では、たいへん問題が多い。

第一に、例えば21の「石高帳」という項目を取上げてみても、領主の統治上作成したもの、村で行政上作成したものの、地主が私的経営上作成したものでは、表題が同じでも、性格はまるきり違うし、内容も異なることが多い。この方式では表題の同じものは、なんでもこの項目に入れる危険性があるのである。これは、「石高帳」という史料表題を項目に採用したためにおこる混乱だが、そういう意味では「地図」(04)とか、「地誌」などといういわば書目が「支配」、「施政」などの抽象的な内容表題と併存していることも問題があるわけである。しかし、この問題はどのような場合の分類方式でも出てくる問題点である。(あとでふれる)。項目相互の関連性自体が不明確な点があるなども問題だが、このさいは取上げない。

第二に、この表は先ほど言ったようにNDC準用の科学分類——主題分類といってもよいだろう——であるが、項目の表記がいかにも現代的すぎるものが多い。「総記」などという概念や語彙が、近世社会で、あるいは当時の史料作成や保管の過程で、在りえたものとは考えられない。もっと正確に言えば、「目録」や「入記」というものはたしかにあるが、近世文書の性格からいえば、「総記」という冒頭に出てくるような成り立ちをしたものではない。例えば土屋家の場合、⁽⁸⁾領主の点検のときに一回ごとにつくられるものである。村の引継目録があるが、⁽⁹⁾これも、その村の

特定の事情が発生したときに、例えば、庄屋役替とか、村替えとかで作成されるもので、常時保存文書の管理の必要上つくられ利用されているものではない。だから網羅的でないことがある。「治安」(40)という項目表記は、この分類表以外でもよく見かけるものだが、これなどは一体、近世社会のどの階層の立場に立ってとらえた概念なのか。階級社会では、支配層が作成する史料は、戸口人別に関する史料でも、交通に関する史料でも、極端に言えばみんな秩序の維持という点で「治安」という観点で作成されている。こういう項目は、ここでの他の項目との関連でみただけでも成り立ちにくいのである。「救恤」という概念も、問題があるが、これも、よく使わざるをえない、苦しい項目である。

第二は、一件史料の処理についてである。ある村で、村ぐるみの訴訟事件が発生した場合を考えてみる。大型の一案に入れたりしてこの訴訟に関する一件史料がまとめて保存・伝蔵していることがある。これは、もちろん現代でも、われわれが関係書類をちょっと保存するときに、大型封筒などに入れてマジックで表て書きをしているように、大変、当事者にはわかりやすく、合理的な保存の仕方であるといつてよい。ところで、この中には、訴状の写しも、回答・指令綴(差紙)とか差立書写し、日記、入用帳、訴訟費用調達のための共有林伐出帳や売渡帳、費用割当ての基準になった持高帳・人別帳や取立帳、出府道中入記や訴訟の成功を祈った祈禱関係史料、関係の領主や役人の名前帳などが沢山入っている。平井方式によれば、これらの史料は、それぞれ、例えば、訴訟、法令、施政、町村財政、林産物、石高帳、割付・取立、戸口、交通、祭礼・信仰、支配などの項目に分散配列されてしまつて、村文書のなかで一件史料として保存・伝蔵されて来たことの歴史的な意味は失なわれ、個々の史料のもつ意味や役割も拡散してわからなくなつてしまつただけでなく、事件全体の復原もできなくなつてしまふ。こういう問題があるわけである。

そこで、もし平井方式のような体系化を考えるならば、われわれはその前段階に、近世社会の身分制や支配機構を

基準にして文書が作成され伝蔵されている事実をもとに、領主・農民・町人・手工業者などの身分ごとに、さらに、これをやや細分化して階層や職種別に何種類かの文書分類項目を先につくることが必要なのではないかと思うわけである。平井方式は、先の①に該当するもので、内容的には、かなり問題があるけれども、それを別にすれば、今後の全国的な史料の所在目録を作っていく場合の一つの姿勢を示したものであるとして高く評価したいと思う。

その意味で、ここには掲げなかったが、明治大学刑事博物館の分類項目は、村方文書にはば限定して、家別文書を書状と簿冊類に分けたものを、アルファベット記号化した分類項目で配列した例として挙げるができる。項目は二六ある。

③児玉幸多「分類表」⁽¹⁰⁾

村方文書について、これまで述べたような、いわば主題による内容分類方式に対して、史料を公的性質のものと私的性質のものに二大別し、この中を、「領主より交付した文書記録類」とか、「村方より領主に提出した文書記録類」などのように史料の運動の方向を基準にした分け方、いわば史料の機能分類のしかたがある。このなかで、さらに内容分類になっているのは、他と似ている。ただ、これでも一件史料が分かれてしまうという問題がある。

この機能（運動）別の分類方式は、国立史料館などでも試みたことがあるが、現実存在する農村文書は、旧村役人層の家に伝蔵されたものが普通で、村役人が地主や商人を兼ねている場合が多いと、公的記録か私的記録か、作成の動機や背景がわからないものがあり、どちらにもまたがると思われるものがあって、今日ではこの分類方式は採用しにくくなっている。（例、村借りや貢租の立替えの史料など）

④山口啓二「藩史料機能分類表」⁽¹¹⁾

いわゆる機能分類方式は、大名文書の場合によく考えられるものとされている。ここに掲げた山口氏の案には、そ

の先例としてミシガン大学のジョン・ホール氏が岡山大学所蔵の「池田家文書」の分類に適用したものである。⁽¹²⁾この方式は、文書の機能ということをも、作成した藩庁（あるいは関連の支配）機構を重くみて考えているという点で、機構分類と言い換えても良いだろう。山口氏のものは、はっきりと大名の支配のしくみ、統治権の在り方＝発動のされ方を念頭において、史料群をその作成の機構＝機能に従って配列している様子がうかがえる。

⑤山口県文書館「毛利家文庫分類項目」⁽¹³⁾

毛利家文庫は、藩主毛利家伝来の史料を収めたもので、江戸時代に毛利藩では「密用方」という、藩主家や諸部局の文書・記録を調査・収集し、保存・管理する部局があつて、いく度かの改変を経て一つの分類項目をつくつてゐる。ここには、はっきりと藩主家が分類の中心におかれ、藩主家と関係する諸機能に従つて史料が配列されることになっている。これは毛利家の史料なのだ、という観点が出てゐる。第⑥表は、明治以後に毛利家の家史編纂所が、その後の史料も含めて新しくつくつた項目であるが、それは先の「密用方」の方法に立っていることは明確である。山口県文書館では、当面これをそのまま（問題があるといひながら）採用している。もし、こうした方式がどこでも採用できるなら、この方式はかなり有効な分類方式ではないかというのが私の一つの提案である。しかし、特殊な用語が使われていて、科学分類になれた頭で共通項目をさがし出す場合にとまどう点が問題になる。しかし、文書はそれぞれ、成立も保存も特有の事情をもっているものであるから、こういう特殊項目こそが生かされるべきだという主張もあり得る。

同じ大名文書でも、これと対照的なのは、日本十進分類規則に準拠し、これに若干の改変を加えた熊本大学の「永青文庫細川家旧記古文書分類目録 正篇」⁽¹⁵⁾（昭和44刊）である。詳細はふれられないが、これは「一般・総記」から始まっているが、実際に使ってみると、目録だけではどういふ性格の史料なのかわからず、関連史料が各項目に分かれ

ている感がある。しかし逆に、必要な項目を探し出すには、かなり便利である（科学分類に基く項目が理解し易いため）。

機能分類をもっと徹底させて試みた例として、文部省史料館の「幕府代官江川家文書」の場合がある。⁽¹⁶⁾これは、史料の作成・提出の機関としての勘定所・代官所などに大別し、その中を史料の運動のかたち「文書形式」——達・触書・願書・伺書・差出書などに細分化して配列する案であった。ここでも、一件史料・関連史料が泣き別れになるという問題が、やはりある。

機能分類のやり方は、藩庁の機構＝職制とか命令系統などがある程度わかっていなければできないし、村方文書では、職制などが分化・整備されていないので出来にくい、という問題がある。この点は、あとで少しふれる。

ここで、資料には掲げなかったが、若干の例を挙げておきたい。少し西南地方の例を掲げよう。

(1) 「山口大学農学部所蔵庶民資料目録 第2」の例。⁽¹⁷⁾「本間家文書」——いろいろな役目をあげている。私どもは、これまでにわかっているならば、この文書の特色を生かすには機能分類が可能と思う。しかし、原型損壊が甚しい場合には（やればできないことはないが）、非常にむずかしかったのではないか。当事者から意見をききたい。

(2) 「九州大学九州文化史研究所所蔵古文書目録」現在までに九集出ている。⁽¹⁸⁾

(3) 佐賀県立図書館「鍋島家蔵書目録」⁽¹⁹⁾

(4) 下関文書館「郷土資料目録」⁽²⁰⁾

これらを総合して考えると、文書の成立事情や家の特質に応じて、分類項目が考えられており、独特の用語をつかった項目をつくり、他の文書では小項目であるところが、その文書では大項目となっているというように、一律の項目表では、ある項目に史料が集中しすぎたり、あるいは全く史料がなくなってしまう、というようなことが比較的に

避けられ、その文書の特徴が生きるような分類がなされていることがわかる。

次に、先の㊦の場合についてふれたのであるが、これについては、むしろ、出席のみなさんに話してほしいところであり、私としてはあまり申上げることができない。充分なコミュニケーションがなかったこともあるし、もう申上げることの趣旨はおわかりいただけたとも思うからである。西では長崎と熊本の両県立図書館をみた。東でも例えば弘前市立図書館、神奈川県立図書館の「郷土資料分類項目表」⁽²⁾がある。Kを付して一般図書とは区別する配慮をした上で、NDC展開に地区名を組合せる方式である。熊本のは、これに年代もいれて組合せている。

ここで若干挑発的にいうことにする。図書館などによくある、いつ、どこから入ったかわからないような数点——数十点の少量文書は分類しないで、年代順位にしておくとかよいのではないか。出所不明の史料が錯綜している場合などは、とくにこの方式によって、通し番号ぐらいにしておいた方がよいと思う。また、「郷土資料目録」として図書や定期刊行物や統計書、パンフレットなどの近代の印刷物と一緒にして十進分類表のなかにいれるが、この場合でも事務処理上どうしても一緒にする必要があるならば、史料は最後尾の方にでもまとめて、前述の方式で一括しておくとういと思う。例えば、「〇九〇」というような分類記号で処理してもよいだろう。郷土資料目録の中で、こうした史料だけを切り離して別立てにした例は、和歌山県立図書館のものがあり、利用しやすい。要は、利用に当って検索が便利であればよいだから、この程度のことを過渡的措置としてやってよいと思う。

分類と配架の關係についても、図書館の方などは、分類配架方式に関心があると思う。しかし、これまで述べて来たような「家」——「村」文書の分類方式の場合は、必ずしもこれにこだわる必要はないのではないか。分類項目の記号化がその図書館で完成している場合でも、文書件数が多くなると、配架や出納にはかえって不便と思う。

[2] 国立史料館での分類方式

そこで、こうしたいくつかの先例に学びながら、国立史料館で実際に行っている分類のしかたを紹介しておきたいと思う。「所蔵史料目録」は、現在二〇集まで出ているが、最近のものから大名人書・農村文書・町方文書各一例を選んでとり上げてみた。項目は紙数の都合で省略してある。史料館では、ふつう、大中小の三層項目を使っている。ここでは（ ）内に入れたものが、小項目である。

土浦土屋家文書の場合は、⁽²³⁾大名家の伝蔵史料であることを前提にして、近世の大名家がどんな社会的・政治的役割と地位を持つものであったかをまず考えて、大名家が、①家の当主であること、②徳川家の家来・臣従者であること、それが「軍人」であることと「役人」であることの二面であらわれているはずであること、③領主・地主であること、④領地についての行政の執行者であること、の四つの側面Ⅱ役割を抜き出し、それぞれの側面Ⅱ機能に立って史料が作成され、襲蔵されていることを大前提にして大項目を設定してある。あえていえば、領主権の保証・確認を裏付ける客観的条件と主体的行為を示す事項とでもいえるか。中項目は、それを細分化したものであるが、できるだけそれを特長的な史料名で表記するように心がけ、小項目になるともっと内容の細分化をして行くかわりに、史料名表記と混在して来る。

これは、文書を作成し伝蔵したものの社会的役割——ここでは土屋という大名家の機能に従って史料の配列を考えたもので、この大項目設定の観点は「加嶋屋長田家文書」⁽²⁴⁾についても同様であるといえる。この分類表をそういう目で、よく検討していただきたいと思う。これらの方式によれば、単に、その史料がどの部局で作成されたかという観点から機能分類の方式もとりながら、一件史料の分断という事態も避けていける。

なお、この二つの目録のように、史料の点数が二千点、三千点と多くなってきたときは、最下層項目の細分化とか、層の多元化が避けられなくなってきたこともあるが、あまり細分化すると分類者の主観が入りやすくなったり、

史料の相互関連がわからなくなったりするので、最下層項目はもちろん、分類項目をあまりふやさないようにするということは、今後の課題の一つにしておきたいと思う。

農村文書になってくると、村政全般にわたる史料と、家の私的史料が混在していることが多いと先に述べたが、この場合でも、誰が何のために作成し保存したかという観点をはっきりたてて分類項目をつくる。「井尻家文書」の場合でも、純粹に「家」に関するものと思われる史料は、できるだけあとに一括し、それ以外のものを大項目で分ける。この場合も、共同体が支配Ⅱ行政の単位として確定されているという近世村落の特質に着目して、この行政の体系を念頭において項目をつくっている。しかし、これも原則に立ってみると不充分で、項目も混乱している（ある程度はさけられない）。

ただ、この三つの例で、すでに気づいたと思うが、これらは、第一に項目が固定的でなく、前例を通して補充・訂正していけるつまかさねの余地を残していること、第二に止むをえない稀な場合を除いて項目表記は現代的表現をさけて実際に江戸時代に使われた歴史的語彙を使うように配慮されている。いずれも、数種の文書分類の経験を通じて考えられているわけだが、これらは、同種文書の共通の分類表を作成する途につながっているとともに、そのさい利用の余地をできるだけ大きくしておくために客観性・科学性をもつことが必要だという態度にもとづいている。分類の実際のプロセスを、具体例に即して説明しなかったが、時間がないので省略する。

[3] 分類の原則

これまで触れて来たことを素材として、では近世文書分類の実際に当たっては、どういう原則を守っていく必要があるか、という点について、家別文書の場合を考えて簡単にまとめておく。

一つの史料に接した場合、われわれは、①いつ△年代△、②だれが（だれに対して）△主体↓客体△、③なぜ（ど

んな状況のもとで）△目的・状況Ⅴ、④どんな方法・手続・立場で、⑥何を△内容Ⅴ、書いたかをみる。これをバラバラにしていけない。総合していかなければいけない。ここがむづかしいところだが、そのためにも、「家わけ」文書が原則であり、これをくずさないことを大前提とする。

①まず、近世社会でその史料が成立した当時の役割・機能を復原（再現）するような分類をすることによって文書の特色を出すこと。

②従って分類項目は、どういう種類の目録をつくる場合でも、現代的表記をできるかぎりさげねばならない。いわゆる科学分類方式は、近世文書の在り方からいえば、できるだけ避ける必要がある。厳密に言えば、「財政」ということは江戸時代には普通使用されない。「財用」はあるが、「財用」は、「財の用途」あるいは「もとで」という意味であり、「財用」と「取立」をわけることができるが、「財政」と「貢租」を併記するのはおかしい。「貢租」は「財政」の中に入ってしまう言葉だからである。また、その文書独自の用語を使うことは、意味や位置づけをはっきりさせておけば、受容してもかまわない。

③項目は、演繹的ではなく、帰納的にすべきで、既成のものに当てはめることを、まず考えてはいけない。同種の史料をあつめて項目を考えることだ。

④明治以前と以降とをできるだけ分けて考える。

⑤多層項目化をはかるにあたっても、層の多元化、項目の多様化はさける。これは「雑」を少なくするためであるが、項目の客観性を失なうおそれがあるからである。

〔4〕 分類の限界

分類の限界については、時間もないので、これまでふれて来たことから推察してほしい。それは、先に述べたよう

に、分類が不要だということでは決してない。かなり困難な条件はあっても、要は史料の持つ本来の生命を活かしていく態度・原則に立っていく場合の問題点であって、これを克服する途が閉ざされているとは思えない。

四 分類方式は確定できるか

時間がなくなってしまった。この問題はむしろ、みなさんと討議するなかではっきりさせていった方が意味がある。簡単にいおう。**[1]主体的条件**と**[2]客観的条件****[3]共通方式の確定**をまとめて述べよう。

要するに、史料館の分類の例を含めて、これまでさまざまな分類方式が示されているが、近世史料の整理や分類の実務に当たっているわれわれとしては、共通の分類方式を確定していけないか、いこうではないかということである。頭の中で考えられた分類方式というものは、現実の家文書を扱う事態に直面しているわれわれとしては、あまり有効ではないことがある。

共通の、平等の立場で実践的経験を交流しあうことによって、目標を分類方式の確定においていくことは、今日、充分な意味があり、その条件はあるのではないか、ということである。条件があるというよりも、条件をつくり出していく必要があるのではないか、といった方が正確であろう。

客観的条件はある。各機関で近世史料を抱えてそれぞれ独自の分類方式をつくり出しており、現につくり出そうとしている。これらの相互関連の検討は、あるべき新しい分類方式のかたちを提唱すること、これはこの席でやるべきだろうが、できない。しかし、史料館などがその役割の一端を担う必要があれば、やらなければならないだろう。当面、身分別による分類表をつくり出していくことから、はじめていけばよいのではないか。

ただそのためには、整理・分類を行うものは、近世社会に関する正確な歴史的知識の持主でなければならないし、

史料を歴史的史料として正しく扱うための識見と抱負がなければいけない、ということも疑うことができない。近世史料を扱うものについては、一般圖書の場合と同等の、あるいはそれ以上の特殊な専門的識見と技能が、ことさらに要請されなければならない。もっと具体的にいえば、①史料が読めて内容が理解できなければならない ②基礎的史実の正確な理解者であること ③その意味で史料の正確な批判者であるという主体的条件をもつこと、である。この点は、われわれ自身が強く認識していく必要があるし、同時に、そういう条件や保証が客観的に与えられなければならないことも当然である。

専門的な史料取扱者としての身分の確立、たとえば、司書に相当するような古文書士というような資格を与え、これを保証していくこと、史料の調査や研究に必要な時間と場所と経済的条件を与えていくこと等がなければ、いままで述べたような人材を確保できない。

共通方式を確定するために、各機関の関係者が対等の立場で、それぞれの対象史料の調査・研究の成果を通じて、討議して行くことが必要であるが、それは、右のような主体的条件と客観的条件が満たされていることが前提であり、何よりも、それは史料取扱者の独自性・特殊性の認識がもっと強化されることが必要なのである。史料取扱者は、歴史研究と史料のサービスの中間で、どちらにも属さない独自の社会的使命をもつものとして存在しなければならない。

〔4〕 残された若干の問題

以上述べて来たことのほかに、触れなければならない問題はいろいろあるが、とくに次の四点を挙げる。

A 近代史料 とくに明治以降の行政機関の文書をどう扱うかである。これは、近世史料と切離せないことである。この点は「史料館所蔵史料目録」第十七集および「史料館報」十三・十五号の関係者の積極的提言がある。⁽²⁶⁾ 当地

では多久市立図書館の目録⁽²⁷⁾のような労作もある。すべて討議のときにしたい。

B 索引の問題　これも、先の三種の目的に応じた目録によって、作り方が違って来るはずで、全部の場合についてふれなければならないが、余裕がないので、討議に譲ることにしてほしい。例えば、人名や年代はよいかもしれないが、史料表題索引(圖書の書名索引に当るもの)は、先の長崎や熊本の場合であるが、史料表題の採り方と関係してむづかしい点が多い。「覚」や「乍恐……」では意味がなくなってしまう。事項索引は分類項目のたてかたとも深くかわってくるが、可能性はある。

C 整理と関係があるが、もし史料の表題が正確に把握されていれば、項目は——史料館の方式でいえば——大項目ぐらい、せいぜい中項目でとどめられる。その際は、目録を作るときなどは、一点ごとの史料解題Ⅱ註記をしていけばよいわけである。山口県文書館や福井県立図書館の方式はこれで、大変すばらしいが、なかなか手数がかかるし、紙数の関係(経費)があって、実現には困難が伴うであろう。

D このほかにも、分類と配架など、整理との関係でいくつか問題が残っている。

＜参考資料＞

以下の資料は、講義者がテキスト『近世史料取扱講習会資料』に掲載したものである。出典の詳細は、補註を参照されたい。

近世史料の分類〔遺稿〕（鎌田）

① 近世庶民史料調査委員会分類項目一覧

法	令	制	規	幕	政	藩	政	村	政	租	税	土	地	林	野
入	会	金	融	売	買	貸	借	質	物	物	価	米	穀	交	通
宿	駅	助	郷	運	輸	通	信	戸	口	農	業	農	書	農	村
小	作	養	蚕	畜	産	林	業	山	村	水	産	漁	村	手	工
醸	造	工	業	鉦	業	商	業	貿	易	商	人	都	市	水	利
土	建	治	安	軍	事	宗	教	凶	災	救	恤	身	分	家	
飲	食	習	俗	学	芸	医	術	通	史	伝	説	地	誌	蝦	夷
絵	図		雑												

② 平井良朋：近世資料主題分類表（新訂第6）

00 総	記	21 石	高	帳	42 取	締
01 通	史	22 田	畑・屋	舗	43 訴	訟
02 地	誌	23 林		野	44 災	害
03 紀	行	24 割	付・取	立	45 救	恤
04 地	図	25 上		納	46 交	通
05 伝	記	26 正		税	47 宿	駅
06 博	物・医	27 附	加・雑	税	48 運	輸
07 美	術・芸	28 国		税	49 通	信
08 学	芸・教	29 助		郷	50 農	林 水 産
09 文	芸・作	30 町	村	制	51 農	民
10 支	配	31 町	村	役	52 耕	作
11 領	主	32 町	村	政	53 農	産 物
12 藩	士	33 町	村	規	54 水	利
13 役	職	34 町	村	財	55 畜	産・養 蚕
14 施	政	35 五	人	組	56 林	制
15 法	令	36 戸		口	57 林	産 物
16 財	政	37 郷	士・浪	人	58 水	産 物
17 藩	営	38 百	姓・町	人	59 水	産 物
18 軍	事	39 穢	多・非	人	60 土	木 工 業
19 士	族	40 治安・救	恤・交	通	61 治	水
20 土	地・租	41 騒	擾・犯	罪	62 土	木

63 建 築	76 商 組 織	89 布 教・伝 道
64 工 業 經 営	77 商 人	90 家 制 民 族
65 紡 織 工 業	78 米 穀	91 家 系
66 食 品 工 業	79 商 品 相 場	92 家 族・相 続
67 雑工業・雑 職	80 社 寺	93 家 産・生 業
68 鉱 山 經 営	81 神 官・僧 侶	94 食 制・服 制
69 鉱 産 物	82 記 録	95 礼 儀・作 法
70 金 融 及 商 業	83 法 規	96 冠 婚 葬 祭
71 通 貨	84 社 寺 經 済	97 祭 礼・信 仰
72 金 融 機 関	85 祭 典	98 年 中 行 事・娛 楽
73 質 物	86 祭 器	99 方 言・伝 説
74 貸 借	87 宝 物	
75 売 買	88 造 営・修 復	

③ 山口啓二：藩史料機能分類表

1 大名の「家」史料

a 家柄を示す史料

- | | |
|------------|-------------|
| (1) 領地関係文書 | (2) 出自を示す文書 |
| (3) 系図・家譜 | (4) 家史・歴代家記 |

b 冠婚葬祭史料

c 私生活史料

2 家臣の「家」史料

3 藩 庁 史 料

a 番方史料

- | | |
|------------------|-------------|
| (1) 番組史料 | (2) 軍役史料 |
| (3) 幕末維新时期軍制改革史料 | (4) 軍学・兵法史料 |

b 役方史料

- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| (1) 表方史料 | (2) 側近・奥方史料 | (3) 寺社方史料 |
| (4) 勘定方史料 | (5) 町奉行所史料 | (6) 郡方・地方史料 |

c 藩学史料

4 家 臣 団 史 料

a 法度・条目・軍令

b 知行・扶持方関係

c 分限帳・武鑑・役人付

d 奉公書・由緒書・家中系図

- 5 用達町人史料
 - a 蔵宿史料
 - b 城下用達町人史料
 - c 三都用達町人史料
 - d 国産会所町人史料
- 6 町方・在町・村方史料

④ 児玉幸多：分類表

第一 公的性質のもの

(一) 領主より交付した文書・記録類

イ 法令 ロ 土地関係 ハ 租税関係 ニ 雑

(二) 領主側の記録類

イ 藩制度関係 ロ 領主関係 ハ 財政関係 ニ 藩士関係
ホ 特殊事項記録 ヘ 雑

(三) 村方より領主に提出した文書・記録類

イ 戸籍関係 ロ 村勢関係 ハ 五人組関係 ニ 職業関係
ホ 治安関係 ヘ 租税関係 ヘ 鷹場・鉄砲関係 チ 雑

(四) 村政に関する記録類

イ 村役人関係 ロ 戸籍関係 ハ 租税関係 ニ 土木関係
ホ 入会関係 ヘ 村方規約に関するもの ト 公用記録帳簿
チ 特殊事項記録 リ 寺社関係 ヌ 雑

教育なども一項目立てうる場合には独立項目とする。

(五) 交通関係

イ 宿場関係 ロ 助郷関係 ハ 宿場・助郷訴訟に関するもの
ニ 中馬その他の宿継荷物以外のもの ホ 関所手形等に関するもの
ヘ 雑

(六) 雑

第二 私的性質のもの

(一) 戸籍関係

イ 出生・死没 ロ 婚姻 ハ 分家 ニ 勘当・久離・帳外
ホ 雑

(二) 財産関係

イ 土地の売買・貸借 ロ 家屋・財産の売買・貸借 ハ 金銭貸借
ニ 相続 ホ 雑

(三) 身分関係

- イ 家格・由緒関係・系図・苗字帶刀免許等
 ロ 質奉公・人身売買・仲間奉公 ハ 家抱・間人・名子等 ニ 雑
 (四) 訴訟関係
 イ 戸籍関係 ロ 財産関係 ハ 雑
 (五) 生業関係
 イ 農業 ロ 商業・金融 ハ 工業 ニ 特殊産業 ホ 雑
 (六) 生活関係
 イ 年中行事 ロ 衣食住 ハ 娯楽・休日 ニ 民謡
 ホ 雑
 (七) 雑

⑤ 山口県文書館：毛利家文庫分類項目

1 雲	上	16 叢	書	31 小	々	控	46 状	控
2 柳	營	17 年	表	32 部		寄	47 罪	科
3 公	統	18 日	帳	33 山		林	48 目	次
4 忠	正	19 日	記	34 産		業	49 給	録
5 忠	愛	20 部	屋	35 賞		罰	50 御	勤
6 巡	見	21 巨	室	36 賞		典	51 規	式
7 格	式	22 諸	臣	37 奉		書	52 吉	凶
8 館	邸	23 譜	録	38 御	意	控	53 普	請
9 諸	省	24 末	家	39 諸		伺	54 諸	隊一件
10 諸	役	25 吉	川	40 法		令	55 旧	記
11 政	理	26 小早川	事	41 公		儀	56 女	儀日記
12 社	寺	27 諸	家	42 美		目	57 繼	立原書
13 祭	祀	28 防	寇	43 三		賀	58 絵	図
14 軍	記	29 風	説	44 参		勤	その他未整理史料	
15 文	武	30 地	誌	45 下		向		

⑥ 常陸国土浦 土屋家文書目録分類項目

領 知 朱印状・領知目録（朱印状・領知目録，御朱印渡・頂戴御礼），郷村高帳・郷村仮名付帳，領知引替，版籍奉還・廃藩置県，絵図（国図，土浦泉州領），城郭（普請・掘浚，城郭図），屋敷（屋敷，屋敷図）

土屋家 家系（系図，系譜，同族系譜，諸家系譜），元服，相統（初御目見，家督相統・隠居，養子），官位（叙任，授爵，正直授勲），印譜・名書，明治後官職（寅直，挙直，正直），吉凶（婚姻，病氣，服忌・服穢，葬儀），

- 熱海湯治，日記（篤直，泰直，英直，彦直，寅直，挙直），武術・学芸（兵術，猪狩図，史誌伝記一下略一），土屋邸御成一件，明治後家政（家政一般，家扶日誌，地所・家屋売買一下略一），目錄・入記
- 勤役 御代替（誓詞，献上），出仕（御足袋御杖願，出仕日），参勤交替（参府，滞府，御暇，仮養子，御供連，在着御礼・献上，通行図），勤番（御門番，火之番，町番，立固，日光勤番，御法事奉行，朝鮮人来聘御用），田中城請取，御手伝普請（川々普請，江戸城普請），国役金，御祝言上・献上（定式御祝儀，時献上臨時献上共，即位，將軍宣下・叙任，勅使下向，御能一下略一），拝領御礼（將軍宣下，御鷹之雁，御料理），見舞（將軍家不例，城内出火，地震），悔（禁裏，將軍家，老中・大名死去），香燭献上，維新後勤役，御用召状
- 御役儀 奏者番（補任，勤仕中書類，御鷹野，諸大名御礼，御葬儀・御法事，一下略一），寺社奉行（補任，評定所関係書類，寺社制），大坂城代（転任，勤役中書類，勤方例書，外国事情，異国船渡来一件，海防，一下略一），大坂城代以後公用人記録（弘化年間，嘉永六年，一中略一明治元年～四年，城代勤方例書，異国船渡来・風聞，その他），京都所司代（転任，勤役中書類）
- 藩政 藩政（藩法，藩財政，維新後藩制改革，戸口，寺社，領内見分，巡見図），勘定所伺（公事方，勝手方），家中（席順，諸士年譜・分限帳，知行・禄制）

⑦ 井尻家文書目錄分類項目

- 支配 （代官所役人，御触，布告・達，差紙，請書，御用状届書日記，その他）
- 土地 （検地，地改，名寄，高帳，土地移動，入会，地租改正，除地，その他絵図）
- 貢租 本途（内見・横見，引方，免，割付，取立，納入，不納，延石，廻米，城米，皆済，その他），小物成
- 村 村法（法度），村況（明細書上），村政（村役人，印判，御用届，役所宛願・届，村役人宛願・届，御用状請取，その他），村入用（検見，人足，郷宿，取越金，取替，小夫継合，借用手形，村入用帳，夫錢割合帳，その他）
- 戸口 宗旨・人別（村，寺社，浪人，婚姻病死届，借屋，枝柿仕立人，欠落，闕所，其他），五人組
- 治安・訴訟 （鉄砲，番人，見廻順番，変死一件，焼失届，盗難，出入・訴訟，その他）

救 恤 (困糶, 貯穀, その他)

水利・普請 (橋普請, 用水, その他)

交 通 (助郷, その他)

宗 教 (神社, 寺院, 民間信仰, 応現寺)

学 事 (学校)

家 家 (系譜・由緒, 身分, 結社団体, 履歴書辞令, 徴兵, 相統, 親族出入, 吉凶, 出入), 経営 (土地, 家屋, 貢租, 御用金, 小作, 商業, 家計・金融, 日記・記録), 学芸・信仰 (教育, 地誌, 手本, 詠草, 武術, 算法信仰), 書状, 雑

⑧ 加嶋屋長田家文書分類項目

幕府御用 御用金, 諸差出金 (川・掘浚入用, 橋掛渡入用, 御救御用・施行錢, 寺社修復金), 御用金掛屋, 引替御用, 公儀御貸附銀 (加嶋屋店取扱, 公銀御貸附拾毫軒組合), 兵庫商社, 大坂御役方御用 (大坂城代, 大坂町奉行)

大名御用 五畿内〔柳生藩, 岸和田藩, 麻田藩〕一中略一・西海道〔熊本藩<蔵元・掛屋御用> (貸附, 預り銀, 生蠟売支配, 御銀仕向御用, 蔵屋敷入用, 扶持・被下米, 家中貸, 新地肥後分), 人吉藩, 延岡藩, 肥後藩, 鹿児島藩, 一橋家, 藩名未詳分]

旗 本 御 用 菅沼氏, 角倉氏 (淀川過書船支配), 小笠原氏 (源右衛門), 附その他武家貸 彦坂氏 (九兵衛) 一下略一

堂上・寺社方 一条家<館入御用>, 有栖川宮御貸附, 熊野三山御貸附

堂島浜方 堂島浜営業株, 米方両替 (浜方先納, 加嶋屋先納, 米切手并先納相印, 切手入替), 蔵米売支配 (讃州高松宇足津米, 肥後米, 浜仲仕)

諸商用 店方勘定 (本店, 船町店, 御扶持受取通, 別家・手代取替銀, 店銀引負), 両替業務 (手形振出, 為替取組, 金銀両替・売買, 預り, 飛脚), 貸附 (貸金訴訟, 在貸)

官省・府県方御用 会計官御用, 陸軍省為替方, 府県為替方 (豊岡県, 飾磨県, 広島県, 香川県, 白川県)

諸商社・会社 為替会社・通商会社, 諸藩物産方 (水戸, 上田, 丸亀), 商社・会社 (山山谷長平, 尽力組, 蓬萊社, 六海商社, 長田組商社, 巨川会社, 内外用達会社出張所, 加島組大島産物商社, 委託金不渡訴訟)

藩債処分

官私負債事件 官 (公) 金負債 (豊岡県, 陸軍省その他各庁), 私債 (丸亀商社,

有馬家、藤本家、三井組、その他)、官私負債調(抵当品調)、不動産・動産処分(大阪市中分、難波村分、鳴尾上田新田分、讃州村黒村分、道具類)

店 政	店制、奉公人(支配人、御屋敷方、通動手代、別家子弟出勤願、奉公人請状、差控・再勤、暇出・退職)、給銀、褒賞、出入入(出勤・勤方、賃銀・前借銀、相続、退身)、助成銀(恩借銀、合力銀、相続講)
家 方	居屋敷・別荘(居屋敷、別宅・別荘、借地)、屋敷沽券(沽券状、沽券書上)、掛屋敷(家守、諸入用、譲渡、貸家、貸蔵)、新田(小島新田、上田新田)、道具(浄瑠璃本板木、酒造道具)
家 政	家法、相続・冠婚葬祭(相続・祝事、仏事)、役職、日記・記録類、家計(買物、旅行、その他)、諸芸(茶の湯、蹴鞠)、信仰(菩提寺、寄進)、奥向奉公人(乳母、妾、給料その他被下金)、奥向出入人(茶人、医者、画人、師匠、相撲、その他)、分家(作五郎家、作次郎家)、別家(別家取立、婚姻・相続、居宅、別家取放)、親族(雑賀屋安田家、鴻池家)、縁故、家政建直(拝借金敷願、出納簿)

補註

(1) 「整理」とは、同講習会で原島陽一が講義した「近世史料の整理、管理」を指す。

(2) この箇所に、「(前回の史料)関東取締出役」と書き込みがあり、受講者に配布されたテキスト「近世史料取扱講習会資料」(国立史料館)の二、関東取締役出役廻状」(万延二年、相州大住郡土屋村原文書)を参照するよう指示されている。左に史料の全文掲げる。

此頃近在所々江浪人又者無宿跡之者共徘徊致し、無心ケ間敷事共申掛及不法ニ候もの有之哉ニ相聞不届之事ニ候、向後右跡之者共立廻り候ハ、聊無用捨捕押置早々可被申聞候、尤手ニ余リ候儀も候ハ、打捨候而茂不苦候、時宜ニ寄鉄砲等相用候而茂不苦候間、隣領之面々江茂申合置其次第二寄候而者相互ニ加勢差出候様可被致候

一 小身之面々知行所之儀者捕押方等不行届儀可有之候間、最寄万石以上諸家陣屋江注進いたし、右注進次第面々居城陣屋等も召捕人数差出し、前同様取計候様兼而手筈可被申付置候

一 御料所并寺社領取締向之儀者最寄領主面々心付候様可被致候

右之趣、関八州御領私領寺社領共不洩様早々可被相触候
二月

別紙之通今般御触出候ニ付、御取締組合村々ニ而も右御触

之趣厚可被相心得候、浪人其外無宿舛之者共立廻り候場所者当出役共追々廻村之上当取締方可申渡条、其旨相心得此段組合村々江茂早々可被及通達候、此廻状刻付ヲ以順達留村々太田源助吉田情平次方江可被相返候以上

(万延二年)

酉二月四日

關東御取締出役

寄場 役人中
大小惣代

(3) 本文末に付載したハ參考資料Vを参照。

(4) 『史料館研究紀要』第1号(昭和四三年)二六七〜二八三頁所収。

三頁所収。

(5) 近世庶民史料調査委員會編『近世庶民史料所在目録』第二輯所載。ハ參考資料V①参照。

二輯所載。ハ參考資料V①参照。

(6) 平井良朋『近世文書整理の理論と實際』所収の近世資料主題分類表(新訂第六)〔圖書館学会年報「四一」〕。ハ參考資料V②参照。

考資料V②参照。

(7) 有坂隆道『近世史料の分類について』〔史泉「二二」〕

(8) 常陸国土浦 土屋家(大名家、後述)。

(9) この箇所に、「(資料27)」と書き込みがあり、註(2)と同じように、テキストの二七頁の「四、大庄屋役替ニ附諸帳面引渡一件」(筑前国怡土郡井原村三苦家文書)を参照するよう指定されている。左に史料の全文を掲げる

(表紙)

「寛政五年

大庄屋役替ニ附諸帳面引渡一件

丑ノ八月

又兵衛
寿六殿」

諸帳面渡方之覚

一 村々面役根帳

巻冊

一 御郡夫元割帳

一 拾式ヶ村軸帳

一 出財紙袋一件入

巻ツ

一 宗旨御儀定

巻冊

一 萬書物案書

巻冊

一 雜穀粗苞卷紙袋苞

右者寛政五丑ノ十月七日
追々遣ス分

(10) 児玉幸多「地方郷土資料の蒐集とその分類」(児玉・丸山二郎『歴史学の研究法』所収)。ハ參考資料V④参照。

(11) 金井円「藩政」所収。ハ參考資料V③参照。

(12) 同右

(13) 「山口県文書館の概要」所収。『毛利家文庫目録第一分冊』緒言、山口県文書館編集・発行 昭和三八年。ハ參考資料V⑤参照。

(14) 同右

(15) 熊本大学法文学部国史研究室編集・法文学部発行、昭和

四四年。

- (16) 江川文庫所蔵「江川家文書」。一時、史料館がこれを借用して整理を行ったときのカード編成を指す。文書は江川文庫に返還されたが、カードは現在も当館に残っている。

- (17) 山口大学農学部編集・発行 昭和三七年。次の補注(18)とともに、それぞれの書名の下に「ノート」と書き込みがあり、別途に用意されたものがあったと思われるが、今回は発見できなかった。

- (18) 九州大学九州文化史研究所編集・発行。昭和三十一年より刊行。昭和四七年講義当時に第九集まで刊行。

- (19) 佐賀県立図書館編集・発行、昭和三九年(其の一)昭和四一年其の二。

- (20) 下関文書館編・下関市教育委員会発行、昭和四二年。

- (21) 「蔵書目録」は、昭和三四年より発行、神奈川県立図書館編集・発行。

- (22) 昭和四七年講習会当時の刊行号数で、昭和五二年現在、第二六集まで発行。△参考資料▽⑥⑦⑧を指す。

- (23) 「史料館所蔵史料目録 第十五集」所収、昭和四四年。△参考資料▽⑥参照。

- (24) 「史料館所蔵史料目録 第十四集」所収、昭和四三年。△参考資料▽⑧参照。

- (25) 「史料館所蔵史料目録 第十三集」所収、昭和四二年。△参考資料▽⑦参照。

近世史料の分類〔遺稿〕(鎌田)

- (26) 「館報一三号」昭和四六年三月、「館報一四号」同七月、

「館報一五号」同十二月。講義者は、この三号に原島陽一と鈴江英一・大村進によって相次いで執筆された県庁文書の目録化と分類の問題についての論稿を指摘していると思われる。原島「県庁文書目録化に関する覚え書」(一三三号)、

鈴江「府県庁文書の目録化と分類をめぐる」、大村「史料館所蔵史料目録第十七集刊行に寄せて」(以上一四号)、原島「県庁文書の分類について」(一五号)。

- (27) 多久市立図書館により編集・発行された「多久市合併前町村役場資料目録」(昭和三九年)、「多久家文書目録」(同)を指すと思われる。

付記

本稿は、史料館が昭和四十七年十月に開催した第十八回近世史料取扱講習会において「近世史料の分類」を分担した際の講義草稿である。

すでに「史料館報」第二五号で報告されたように、昨五十二年六月三十日に当館教授第一史料室長鎌田永吉氏が、わずか一ヶ月の入院闘病で急逝されたことは、誠に痛恨の極みである。今年の紀要編輯にあたり、永年館務に精励された同氏を記念する途はないであろうかというのが、館員一同の気持であった。

本稿は、同氏が生前に残した著作物の中で、未だ活字化されておらず、かつ内容も本誌にふさわしいので、これを掲載して同氏に対し些か追悼の意を表わすことにしたものである。掲載にあたり、これを快諾された御遺族に対し深甚なる謝意を申上げるとともに、謹んで故人のご冥福を祈るものである。

以下、本稿編輯の経緯について略述する。掲載を考えたのは、講習会で原稿を手に入れたことを思い出したからであったが、その原稿を探し出すために、同氏の夫人と御子息が、御自宅の書庫に収められた夥しい資料や書類の山を丹念に点検して下さった結果、二種類の原稿が発見された。一つは、本稿の第三章に相当する部分までを書いたもので、他はここに印行した原稿である。前者は、その内容からみて第一草稿と呼ぶべきものと思うが、本稿とは叙述にかなりの相異があり、この問題に対する著者のなみなみならぬ意欲を伺うことができる。本稿にも推敲のあとは著しく、その筆色も青黒赤と多様であり、この講義を福岡と東京との二会場で繰り返した間にも、恐らく加筆していたと思われる。しかし、本稿が草稿であって、完成稿でないことに変わりはなく、また講義案であるために文体に口語と文語が混用されているような不統一もみられる。

これを活字化するに当って、本稿が講義の録音テープからの再生でなく、講義案の印行であることを考慮して、若干の補訂を施した。まず、講義テキストによって、冒頭に目次を加え、これに合せて原稿の見出し用語の一部を修正した。なお、「第

五章 おわりに」の項は章名のほかは一字も記されず未完に終っているため、本文ではこれを削除した。ただし、全体の構成を示すために目次ではそのままに残した。このほか、強調するための重複を削り、仮名を漢字に改め、時に語句を補うとともに文語体に統一した。何れも原文の意味を誤らない範囲で、趣旨を正確にするために最小限に止めたが、もし少しでも著者の意遂に反し、あるいは原文の味を損ねたとすれば、それらはすべて校訂した原島陽一と井上勝生両人の責任である。本文末に付載した分類表は、他の刊行物からの抜粋であるが、講義テキストに収載して本文中でも参照利用しているので、これを転載した。末尾に二段組みで記した本文の補注は、校訂者の加えたさかしらである。著者の意に背くとすれば、これまた著者と読者にお詫びしなければならない。

なお、いうまでもないが、本稿は講習会の一単位として講述するために用意されたものであるため、講習会の性格や他の課目との関連など多くの制約をもつものである。読者は、この点に留意されて、著者の趣旨を汲みとっていただき度いと思う。

(校訂者誌)

